

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 矢萩新一

「平和への道のり」

—8月の祈りを前にして—

管区事務所総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一

「神の憐れみ深いみ心によって、あけぼのの光がわたしたちに臨み、暗闇と死の陰にいる人を照らし、わたしたちの足を平和の道に導く」（日本聖公会祈祷書「ザカリヤの賛歌」より）

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会という国際NGOに日本聖公会は参加しています。キリスト教界では、日本カトリック教会や日本キリスト教協議会（NCC）も参画し、仏教・神道・新宗教・イスラム教など、諸宗教の対話と協力によって平和を構築していくことを目的としています。

世界宗教者平和会議・WCRP/Religions for Peace (RfP) は、1970年に京都で発足し、「あらゆるいのちと尊厳を守る」ために、世界90カ国以上の諸宗教のネットワークによって、「世界に広がる出会いと対話（国際協力）」、「核兵器のない世界へ（核兵器廃絶・軍縮）」、「気候変動に向けた取り組み（環境問題）」、「難民を支える（難民問題）」、「和解につながる取り組み（紛争変容・予防）」、「災害の復興支援」という6つのテーマに取り組んでいます。

その活動の中の「ストップ!核依存タスクフォース」が主催し、広島G7サミットに向けて「宗教者による祈りとシンポジウム」が5月10日にカトリック幡町教会・世界平和記念聖堂で開催されました。その後、『G7サミットに向けた宗教者提言～「ヒロシマの心」が導く持続可能な平和をめざして～』が、首相官邸で岸田首相との会談の席で手渡されました。祈りとシンポジウムについては正義と平和委員会原発問題プロジェクトのニュースレター「いのちの海と空と大地」27号に報告が掲載されていますが、WCRPの平和研究所副所長でもある西原廉太主教がシンポジウムの発題者として参加され、世界教会協議会（WCC）の声明「核から解放された世界へ」（2014年WCC中央委員会）に触れて語られました。「WCRP」や「日本聖公会原発問題プロジェクト」とインターネットで検索してぜひご覧ください。

2017年に国連で採択された「核兵器禁止条約」が50カ国の批准を経て2021年1月に発効しました。被爆経験者の切実な訴えや

□会議・プログラム等予定

（2023年7月25日以降・前回未掲載分）

7月

- 17日(月) 宣教協議会実行委員会(Web)
- 24日(月) ハラスメント防止・対策研修会(西日本宣教協働区)(Web)
- 31日(月) 資産運用規程検討タスクフォース会議〔管区事務所〕

8月

- 3日(木) ～4日(金) 宣教協議会実行委員会〔ナザレの家〕
- 14日(月) いのちを見つめる祈りの集い〔Web〕
- 18日(金) 宣教協議会実行委員会(Web)
- 19日(土) 原発はやめようよZoomカフェ〔Web〕
- 23日(水) 正義と平和・沖縄プロジェクト会議〔+Web〕
- 23日(水) 聖公会関係学校代表者会議〔名古屋〕
- 23日(水) ～24日(木) 聖公会関係学校教職員研修会〔名古屋〕
- 28日(月) 人権セミナー下見〔京都〕
- 30日(水) セーフ・チャーチWG〔管区事務所〕
- 31日(木) ～9月3日(日) 全国青年大会〔東京〕

9月

- 5日(火) ～7日(木) 管区共通聖職試験〔各教区〕
- 7日(木) 人権問題担当者会議〔Web〕
- 11日(月) エキュメニズム委員会(カトリック・ルーテル・聖公会合同)〔Web〕
- 11日(月) いのちを見つめる祈りの集い〔Web〕
- 12日(火) 年金委員会〔管区事務所〕
- 13日(水) ナザレ委員会〔管区事務所〕
- 13日(水) ハラスメント防止・対策研修会(東日本宣教協働区)(Web)
- 15日(金) ハラスメント防止・対策研修会(中日本宣教協働区)(Web)
- 19日(火) ～20日(水) 日韓協働合同会議〔済州+Web〕
- 22日(金) ハラスメント防止・対策研修会(西日本宣教協働区)(Web)

(次頁へ続く)

★管区事務所夏期休業

8月7日(月)～14日(月)までの間、夏期休業いたします。よろしくお願ひいたします。緊急の場合は総主事まで。

過去の戦争への反省があるならば、日本がこの条約に批准することは必須ではないでしょうか。そして今年も、広島と長崎の原爆投下と敗戦の日を覚えて祈る時を迎えます。原発も含め、私たちは核に依存することを止め、核と人類は共存できないこと、本当の抑止力とは私たちの良心・信仰であることを心に刻む8月でありたいと思います。

イエスさまがこの世にお生まれになる喜びをザカリヤが歌った賛歌を思い起こしつつ。主の平和。



□常議員会

第67(定期)総会期第6回 2023年7月6日(木)

＜主な決議事項＞

1. 新規収益事業の改修工事に関して、複数工事業者に見積もり依頼を行ない検討した結果、資材の高騰など工事費の大幅な増加はあるものの、(株)江口に1億8,687万円が発注することとし、2023年9月～2024年3月で工事を行ない、2024年4月から賃貸を開始することを確認した。聖公会センタービル1階への書庫移設と旧聖バルナバ教会の事務所化工事・移転経費などで4千万円の経費がかかっており、工事費の総額は約2億3千万円となるが、収益事業会計から4千万円、宣教財政強化資金から1億9千万円の支出を承認した。
2. 管区の顧問税理士の変更・契約に関して、承認した。
3. 管区の資産運用規程検討タスクフォースに関して、年金資金やナザレ資金を含む安全な資金運用に向けて規程を再整備することを承認した。
4. 祈祷書改正委員会の委員補充に関して、越智容子執事(北関東)と坂本日菜さん(横浜)に加わっていただくことを承認した。
5. 日韓聖公会宣教協働40周年記念大会(九州)の日程変更に関して、大韓聖公会の要望を受け、当初の2024年10月7日～10日から、10/21日～24日とすることを承認した。
6. 祈祷書改正に関わる総会報告をHPへ掲載することに関して、承認した。

(前頁より)

26日(火) 管区共通聖職試験委員会 [Web]

＜関係諸団体会議・他＞

7月25日(火) NCC 役員会・常議員会 [早稲田]

26日(水)～28日(金) 第64回聖公会保育連盟・全国保育者大会 [函館]

8月4日(金) 世界宗教者平和の祈りの集い [比叡山]

6日(日) 広島平和礼拝 [広島復活教会]

8日(火) NCC 役員会 [Web]

9日(水) 長崎原爆記念礼拝 [長崎聖三一教会]

25日(金) WCRP ストップ!核依存TF [Web]

9月3日(日) 関東大震災100年中国人・朝鮮人虐殺犠牲者追悼集会 [在日大韓基督教会東京教会+Web]

11日(月) 日本キリスト教連合会常任委員会 [Web]

23日(土) 大韓聖公会大田教区主教按手式 [天安]

27日(水)～10月4日(水) CCA 総会 [インド]

7. 日本聖公会「ナザレの家」利用規約の修正に関して、承認した。

次回会議：10月17日(火)、12月6日(水)

□各教区

九州

- ・聖職按手式 2023年7月28日(金) 11時～日本聖公会九州教区主教座聖堂 福岡聖パウロ教会 司式：主教 ルカ武藤謙一 説教：司祭 テモテ山崎貞司 司祭按手志願者：執事 マグダラのマリヤ島 優子 執事按手志願者：聖職候補生 ダビデ佐藤 充



- †逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 ディヴィット・アンソニー・コフリン (九州教区・退) 2023年7月20日(木) 逝去(85歳)

《人事》

東京

司祭 アモス金 大原	2023年7月15日付	三光教会牧師の任を解く。 大森聖アグネス教会管理牧師の任を解く。 香蘭女学校チャプレンの任を解く。 ハラスメント防止委員会委員長および委員の任を解く。
	2023年7月16日付	聖アンデレ主教座聖堂付とする。
司祭 ニコラス中川英樹	2023年7月16日付	三光教会管理牧師に任命する。 ハラスメント防止委員会委員長代務に任命する。
司祭 ジェームズ須賀義和	2023年7月16日付	大森聖アグネス教会管理牧師に任命する。
司祭 ナタナエル池 星熙	2023年7月31日付	聖パウロ教会牧師の任を解く。 真光教会管理牧師の任を解く。 願いにより、大韓聖公会ソウル教区への転籍を許可する。
主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸	2023年7月31日付	目白聖公会管理牧師の任を解く。
	2023年8月1日付	聖パウロ教会管理牧師に任命する。
司祭 フランシス下条裕章	2023年8月1日付	真光教会管理牧師に任命する。
司祭 ヨセフ太田信三	2023年8月1日付	目白聖公会管理牧師に任命する。

神戸

<信徒捧事者認可> (徳山聖マリア教会)	2023年6月19日付(任期1年) ダビデ末永 聡、テレサ寺田弘枝
-------------------------	--------------------------------------

PEACE

□日本聖公会東北教区(秋田市内集中豪雨による)被害状況について

日本聖公会東北教区(秋田市)の被害状況:
秋田聖救主教会信徒1名の自宅水没、5名の信徒宅床下浸水と、所有する車も被害に遭いました。聖使幼稚園園児家庭にも被害が報告されています。自宅水没の方はご兄弟の家に避難しています。(7月24日時点)

東北教区独自の支援活動はいたしません
が、秋田市や複数の社会福祉協議会がボラン

ティアセンターを立ち上げてボランティアを募集しています。

また、秋田県大雨災害義援金受付窓口が開設されて募金が始まっています。どうぞ、一日も早い復旧のためお祈りください。

日本聖公会東北教区
主教 フランシス長谷川清純

特集・2023年「沖縄週間 / 沖縄の旅」**「沖縄週間 / 沖縄の旅」に課せられたもの**

—何を学び、確認するのか—

日本聖公会 正義と平和委員会 委員長

主教 ダビデ 上原榮正

「不沈艦空母」あるいは「太平洋の要石」と呼ばれ、米軍基地の多くを抱える沖縄では、安全保障維持のため日々軍事訓練が行なわれ、また駐留米軍と民間人の間には事件・事故が多発しております。日本は1952年サンフランシスコ条約で沖縄、奄美、小笠原を切り離して独立し、高度成長を成し遂げました。1972年、米軍は沖縄の施政権を日本に返還します。しかし、沖縄県民の期待とは裏腹に復帰後も米軍基地を残し、現在も地政学的理由を言い訳にして、沖縄に米軍基地負担の多くを強いています。本土から遠い沖縄での出来事であり、それをめぐる県民の思いは、本土の皆さまには殆ど届かないようです。

1980年代、日本経済はバブル期を迎えます。経済も給与も右肩上り、誰もが裕福になることを夢見ていました。日本が高度成長を成し遂げられたのは日本人の勤勉さと努力もありますが、何よりも平和だったからです。日本社会が経済活動に専念出来たのは、日米安保条約があったからです。日本は周辺諸国との安全保障を在日米軍に多くを担わせ、軍事に多くの予算を割くことなく、医療、教育、年金、社会保険等で社会主義的な国家となり、国民の多くが中流意識を持った時代でした。

この頃から沖縄から本土への問いが始まりました。それは、日本が「平和だ」、「豊かな国だ」と言い続けることへの問いです。「平和ボケ」という言葉もありましたが、それは日米安保条約の負の多くを沖縄に押し付けながら、沖縄には無関心から出た言葉だったように思います。沖縄では今も、米軍の陸・海・空の訓練が続けられ、戦争時の不発弾など見つければ、生活は中断されます。

本土にも原発問題など都市から離れ、過疎や貧しい地域に問題を押し付けているものがあります。それで、沖縄を切り口として、各地にある「正義と平和」に関わる問題に教会としてコミットしましょうと、「正義と平和委員会」の設置が1986年の日本聖公会の第39(定期)総会で決議されました。

その後、「正義と平和委員会」は、靖国や部落差別など6つの社会問題委員会を1つに纏めた委員会名となり、沖縄にある問題は沖縄プロジェクトに引き継がれました。沖縄プロジェクトでは毎年「慰霊の日」近辺に、沖縄にある「正義と平和」の問題をテーマに各教区の皆さまと宿泊研修を行なっております。

1989年東ドイツのベルリンの壁が崩壊、続い

てソビエト連邦が崩壊し冷戦は終結しました。米ソは和解へと進み、核の危険も遠のき、世界は平和に向かい歩いていくと誰もが信じていました。沖縄の米軍基地ものんびりとし緊張感もなく、知人がいれば民間人も基地内への出入りも自由な時代でした。

冷戦終結で、米国にも莫大な軍費の支出と世界の米軍基地は大きな負担となり、基地の整理縮小が図られます。1995年3人の米兵による女子暴行事件が起き、普天間基地移設と嘉手納基地以南の返還が決まります。米軍にとって普天間基地移設は渡りに船だったと思いません。戦後すぐ建設された普天間基地は老朽が進み、数年後には使用不能というのが専門家の見立てでした。沖縄県では普天間移設は県外へと申し入れますが、願いは無視されました。

2001年9月11日、ニューヨークの高層ビルに2機の旅客機が突っ込む同時多発テロが起き、世界は一変します。平和ムードは一転、在沖米軍基地はテロ対策として、幾つかの基地ゲートを閉鎖しました。ゲートには巨大コンクリートブロックが置かれ、出入りは厳しくチェック、民間人は基地への出入り禁止となりました。在沖米軍の軍事訓練も激しくなりました。

2003年のイラク戦争の頃から沖縄の米軍基地機能も見直され、新しい建物や訓練施設が出来ました。戦闘訓練で中東の戦場へと向かう米軍人の気性は荒くなり、基地外で飲食をする米軍人は問題を多発するようになります。米軍は来沖軍人へ事件・事故防止の教育をしていると言います。しかし、戦争＝人殺しの訓練に来る兵隊にどのような教育をするのか疑問視されています。

2004年、普天間基地の大型ヘリが沖縄国際大学に墜落、周囲に大きな恐怖と被害を与えました。2012年普天間基地に大型ヘリに代わり、オ

スプレイが配備され地域への危険度と騒音被害が増えています。

普天間基地移設の原案は、辺野古沖にフロート状の大きな鉄の箱舟を造り、航空母艦のように自力あるいは曳航により移動可能な基地でした。それが埋立に変更され、滑走路も騒音削減を理由に1本から2本となりました。辺野古には弾薬庫があり、長さ300m級の巨大艦船も横付けできるバースが出来れば武器・弾薬の積み出しも迅速になります。新基地は日本政府の予算で建造して、グアムの基地と連動した強力な基地となります。アメリカは台頭する中国に対して、基地機能を強化しています。

「2023 沖縄週間/沖縄の旅」はコロナが第5類に変わったことで、6月23日～25日、対面で開催され、沖縄戦を中心に学びました。沖縄戦から学ぶことは、軍隊は住民を守らないということです。戦争になれば住民が犠牲とされるのは、ロシアとウクライナの戦争を見ても明らかです。

2013年、政府は安保関連3法案を可決しました。そして尖閣問題、台湾有事、北朝鮮のミサイル発射等を理由に、沖縄本島、宮古、石垣、与那国島に自衛隊基地を建設あるいは強化し、ミサイルを配備しました。戦争に備えて琉球石灰岩の岩盤調査や住民のシェルター避難訓練も行なわれていますが、地元住民への十分な説明や了解はありません。本土から見えない所で、戦争への準備が進められ、常に沖縄は危険にさらされています。「沖縄に来れば安保が見える」と言われる所以です。

戦争は突然には起こりません。法律の整備、軍備と軍事訓練、民間の協力体制などが整えられ、戦争が出来るのです。どの国も戦争の大義名分は、国民の生命と財産を守るため、仕方のない戦争だと言い訳をします。日本聖公会の皆

さまに申し上げたいことは、何があろうとも戦争は駄目だということです。

命は失われたなら、取り返しが出来ません。命こそ宝です。わたしたちの命は神が与えられたものです。神さまのみ心は、命が尊ばれ、人々が平和に自由に、喜びと感謝を持って日々を生きることです。

沖縄県民の願いは「沖縄を再び戦場にさせない」ですが、キリスト者の願いは、「世界のどこでも戦争を起こさせない」であるはずで、「沖縄週間/沖縄の旅」は、そのことを念頭に企画がされています。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし/槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず/もはや戦うことを学ばない。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。 (イザヤ2:4, 5)

総合報告

「沖縄週間/沖縄の旅」で得られたもの

～4年ぶりの対面開催を終えて～

正義と平和委員会 沖縄プロジェクト担当委員

司祭 サムエル 小林祐二

「沖縄週間/沖縄の旅」は、沖縄教区が置かれている歴史と現実を日本聖公会全体で広く共有することを目的とし、毎年沖縄慰霊の日(6月23日)に近い主日の午後に沖縄教区がささげる「慰霊の日礼拝」にあわせ、主日を挟む金～月曜日に開催してきたものです。2020年から2022年までの3回は感染症拡大防止対策としてZoomを用いたオンラインで開催してきましたが、本年はぜひ対面で開催したいと願い、規模を縮小して管区参加者定員を20名、期間を一泊短縮し2泊3日として準備を進めてきました。本年該当する日程は6月23(金)～25日(日)となり、ちょうど沖縄慰霊の日当日から始まることとなりました。

沖縄での新型コロナウイルス感染者数は開催直前に増加傾向となり、また初日の那覇空港は慰霊の日式典参加者の関係で混雑・規制が予想される等、懸念事項はいくつかありましたが、トラブルなく無事に開催することができましたこと、まずは感謝をもって報告いたします。

5月初めの各教会への案内後、締め切りの月末を待たず2週間ほどで満員となり、対面開催への期待の強さを感じつつ、参加を断念いただいた方々には申し訳なく思いました。この場をお借りしてお詫びし、次回以降のご参加をお願いいたします。途中参加の方もおられたため、調整の結果参加者数は延べ管区22名・沖縄教区28名、スタッフは管区3名・沖縄教区6名とな

りました。

■初日の学び

初日の23日は東京からの参加者が搭乗する便に遅延が生じ、プログラムの開始を1時間ほど遅らせることとなりました。一同でバスに乗り本島南部・糸満市の「荒崎海岸」へ降りました。この海岸は沖縄戦最後の激戦地とも呼ばれ、聖歌423番「沖縄の磯に」とも深い関わりを持ちます。最近ではサーファーの多い海岸となっているようですが、慰霊の日ということもあってか、ちいさなお子さんを連れてご家族が過ごしておられるのみでした。かつてこの沖を覆い尽くした米艦隊、また茂みで息を潜めた人びとのことを思いつつ、開会・平和の祈りをささげ、同聖歌を歌いました。

続いて訪れたのは「魂魄の塔」。この塔は、この後訪れる国立沖縄戦没者墓苑ができる前までは沖縄で最大の慰霊塔でした。戦没者の魂の平安を祈る一方、未だ遺骨の収集が終わっていないこの地域は、普段は土砂運搬のダンプが往来しているのが現状です。その後は「沖縄県営平和祈念公園」へ移動し、「平和の礎」の規模からは戦没者の多さ、「沖縄県平和記念資料館」からは沖縄戦の事実、そしてこれら施設に込められた平和への願いにふれました。

その後バスで主会場の三原聖ペテロ聖パウロ教会へ移動し、オリエンテーションとふりかえり、就寝前の祈りをもって一日目を終え、それぞれに夕食、宿泊ホテルへと向かいました。

■沖縄戦の歴史を伝える二つのガマ

二日目朝は三原聖ペテロ聖パウロ教会に集合して朝の祈りをささげ、まず「戦場ぬ童（いくさばぬわらび）」という映像を観ました。1985年、沖縄戦40周年の節目に公開された記録映画で、アメリカ公文書館の当時の記録映像を集めたいわゆる“1フィートフィルム”の映像を交えつつ、集団自決の体験談等、沖縄戦の惨劇と現在（作成当時）が綴られ、昨日の学びが更に

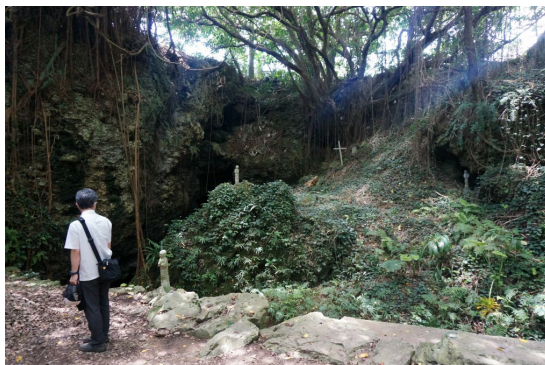
生々しいものとなったのではないのでしょうか。

続いてバスで「浦添ようどれ」へ。初日は曇り空でしたがこの日は夏の空が拡がり、照りつける日射しのもとで記念撮影。皆さんいい顔をしておられるのですが、この「ハクソー・リッジ」の激戦について聴いた後ですので、心中は複雑であったのではないかと思います。



その後は徒歩で浦添城趾霊園を抜けて沖縄教区センターへ移動し、昼食の後バスで読谷村（よみたんそん）へ向かいました。広大な嘉手納飛行場（米：Kadena Air Base）、読谷村の米軍読谷補助飛行場跡を通り、「チビチリガマ」へ。沖縄戦で集団自決が行われたガマ（自然にできた鍾乳洞）です。1944年10月10日に米軍によって行なわれた南西諸島への大規模空襲以来、人びとはガマへ逃げ込むようになっていました。翌年4月1日には読谷村へ米軍が上陸し、このチビチリガマにも接近しました。米兵によって投降を呼びかけるビラや食料が置かれていましたが誰ひとり信用せず、翌日武器を持たない米兵がガマへ入り呼びかけるも、「出て行けば殺される」と言い聞かされていた人びとは、ひとり、またひとり、家族同士での自決を選びはじめ、最終的に31世帯139名の避難者のうち80名以上が自決に至りました。2017年9月には4名の少年により遺品損壊事件が起きましたが、その後少年たちはかつてこのような歴史があったことを学び、「毎年6月には手を合わせにいきたい」と述べたそうです。現在ガマの入口にはチビチリガマ遺族会によって「ガマの中には私達、肉親の骨が多数残っています。皆様か、ガ

マに入って私達の肉親を踏み潰していることを私達は我慢できません。参拝は、再建しましたチビチリガマ世代を結ぶ平和の像をお願いします」と記された看板が置かれていました。慰霊の日翌日、供えられたばかりの真新しい千羽鶴が印象的でした。また付近には、自決者のひとりにクリスチャンがいたことから12のお地藏さんに加え十字架も据えられていました。



続いて同じく読谷村内にある「シムクガマ」へ向かいました。このガマも同じく読谷村民が避難していましたが、集団自決は起きませんでした。同じように米兵が迫り、人びとは混乱しましたが、ハワイからの帰国者である比嘉平治さん・平三さんのふたりは、アメリカ兵と対話し、抵抗しなければ殺すことはないとのことから「アメリカーガー、チュォクルサンドー(アメリカ人は人を殺さない)」と人びとを説得し、およそ1,000人が投降に至ったそうです。この二つのガマから、生死を分けるに至った背景を学びました。

その後は休憩をかねて読谷村の特産品・紅芋を使った菓子店に立ち寄りました。ところが目当てのお菓子は見当たらず、病気による紅芋の生産減、また観光客の急激な増加という沖縄の現在を知ることとなりました。付近の海岸はサンゴ砂の白・青い海、沖縄ならではの美しいものですが、2021年の小笠原諸島での海底火山噴火により漂着した軽石がわずかに残っていました。

その後バスで「道の駅かでな」に立ち寄りま

した。かつては「安保の(見える)丘」と呼ばれる小高い丘から嘉手納基地を見ることができましたが、最近はこの道の駅の展望台が拡張され、米軍機の説明板も設置されており、基地の見学はこちらが主となっています。慰霊の日翌日で土曜でもあることから訓練は行なわれておらず、会話が遮られない“静かな”見学となりました。



まだ明るい17:30には三原聖ペテロ聖パウロ教会に戻り、夕の祈りをささげた後グループに分かれてのふりかえりを行い、二日目のプログラムを終えました。

■慰霊の日の礼拝へ参列

三日目は一同で三原聖ペテロ聖パウロ教会の主日聖餐式に参列し、プログラムは解散となりましたが、帰路につく方々を考慮してオプションとした「慰霊の日礼拝」にもほとんどの方が参列されました。北谷諸魂教会でのこの礼拝では、毎年「平和の礎」に追加刻銘された方々を憶えます。本年は365名と過去最多となる方々のお名前が読み上げられました。うち県外出身者で最も多く追加刻銘されたのは広島県の296名で、1945年4月7日に鹿児島県沖で撃沈された戦艦大和の乗組員であったとのこと。平和の礎の刻銘対象者は、基本的に「国籍を問わず、沖縄戦でなくなった全ての人々」とされています。除幕された2014年以来毎年追加刻銘が行なわれているということは、沖縄戦での戦没者の全

貌が未だ把握し切れていない、かつ民間人を巻き込んだ大規模戦闘であったことを改めて物語っています。礼拝後はホールにて宮古島への自衛隊配備に関係したドキュメンタリー映画を視聴しました。

今年の旅の主題聖句は「実に、キリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し…」(エフェソ2 :14 17) でした。久しぶ

りの対面開催となった今年の旅を終え、安堵とともに様々な思いが去来しますが、7月9日(聖霊降臨後第6主日・特定9)の使徒書にあった「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。」(ローマの信徒への手紙8:6)の言葉が深く響きました。「本土と沖縄」という対立構造や政治や嗜好の視点からではなく、キリストの平和に基づいてこの世を生きたいと思わされています。主の平和がありますように。

■参加者の感想

2023 「沖縄週間 / 沖縄の旅」の振り返り

真志喜 修 (沖縄教区・小禄聖マタイ教会)

現在、戦争体験者は全体で1割を切っていると言われていています。どこでも戦争の悲劇を伝える語り部が少なくなり、それを受け継ぐ担い手も少なく、どのように継承するかが、課題となっています。また、沖縄の各教会等においても、戦争体験者が少なくなっています。私が小学校の頃は、ほとんどの先生、大人が戦争体験者で戦争の悲惨を話してくれました。今回の沖縄の旅は、3年ぶりの対面開催となり参加しました。

一日目は沖縄教区主教(以下主教)がガイドを務め、那覇空港から平和公園へ行きました。ここでは約二時間の見学があり、私は東京から参加した信徒3名の方と一緒に回りました。資料館では、説明できるところは説明しましたが、時間が足りませんでした。それから平和の礎に向かい一緒に回りました。

二日目は三原教会に集合して、前田高地(浦添城址・ゆうどれ)に向かいました。そこでも主教がガイドを務め、いろいろ説明してくださいました。主教を先頭に、徒歩でベッテルハイムホールに向かいました。そこで昼食をとり、読谷のチビチリガマおよびシムクガマに向かいました。最初のチビチリガマは集団自決のあったガマで、肉親同志が殺しあった悲惨なガマでし

た。またシムクガマは千名いて、死者が一人も出なかったガマでした。なぜかという、ハワイ帰りの人がいて、アメリカ軍は捕虜を虐待しないと説得したということでした。偶然にも、その人の姪が参加しており、叔父さんの、その後の話もしてくれました。

NHKの特集だったと思いますが、有名な女性作家の「ミッドウェー海戦」という番組を見ました。ミッドウェー海戦に参加した日本軍の兵士・遺族の証言、アメリカ軍の兵士・遺族の証言などがありました。初めて日本軍が敗戦した戦いでもあり、これを境にして日本軍は敗北に向かいました。

作家が取材した中で、両軍の様々な人間模様がありました、その中で私が感銘を覚えた言葉が、あるアメリカの遺族が語った「私は忘れることはできないが、赦すことはできる」という言葉でした。確かに忘れようと思っても人間はそう簡単に忘れることはできないが、赦すことは時が経てばできることを知りました。

最後になりますが、私が参加し始めの頃から、今まで司会、進行をして頂いた、柴本孝夫・小林祐二両司祭に感謝申し上げます。更に、今後とも宜しく願います。

■参加者の感想

「沖縄週間 / 沖縄の旅」に参加して

6月23日から25日まで、沖縄週間/沖縄の旅「命^{ぬち}どう宝」が、コロナによる3年の対面開催休止を経て再開されました。

一日目は魂^{こんぱく}魄の塔（戦争後、散乱していた遺骨が集められた所）で祈り、住民が追い詰められた南部の海岸で聖歌423番を歌い、平和祈念公園の資料館と平和の礎（沖縄戦で亡くなった敵味方24万人の名前が刻まれている）を訪れました。

二日目は三原聖ペテロ聖パウロ教会でDVD「戦場^{いくさば}ぬ童^{むらび}」を見た後、浦添ようどれ（王陵）から、普天間基地、また激戦地であった嘉数高地を望み、前田高地（映画「ハクソーリッジ」の舞台）、チビチリガマ（1945年4月米軍上陸後、残虐な米兵から逃れるためとして、集団自決で83人が犠牲となった）とシムクガマ（壕内のハワイからの帰国者が米兵と話をし、米兵は人を殺さないよ、と沖縄言葉で住民を説得。1,000人の命が助かった）に行き、沖縄教区センターベッテルハイムホールで昼食の後、「道の駅かでな」の昨年4月に完成した新展望台から、極東最大の空軍嘉手納基地を一望。夜には、6つのグループに分かれ、教会で振り返りをしました。

一日目から上原主教様がガイド役を務め、沖縄戦の始まり、100日もの長期にわたった戦い（軍官民共生共死）、その中で何があったか、自分の家族に起こったこと、沖縄の現状についてお話をしてくださいました。

私の中で心に留まった言葉は、「私たちの見えないところでどんなことが起きているか

安次嶺佳子（東京教区・三光教会）

を、想像する力をもってほしい」「なぜ私がここにいるのか。私自身の問題として考えてほしい」ということでした。

日本の近辺が騒がしくなっている昨今、国を守るためには基地も武器も必要、と言いながら、私たちは、「でも自分の近くにはあってほしくない。沖縄なら自分から遠いし、国境に近いから、いいのではないか」と思っていないでしょうか。そういう考えを、not in my backyardと言います。でも本当に沖縄である必要はあるのでしょうか。私たちはふたたび沖縄を犠牲に、「捨て石」にしようとしてはいいのでしょうか。

実際に沖縄に行き、基地が沖縄の地でいかに大きな割合を占めているか、そのためにどれほどの不便と不都合が起きているか、そして沖縄戦で何があり、戦争とはどういうものかを、自分の目で見て話を聴くことが本当に大切です。

「見よ、私はシオンに一つの石を据える。これは試みを経た石、確かな基礎となる貴い隅の親石。」（イザヤ28:16）

大きな痛みを経験した沖縄こそ、世界、特にアジアの平和の確かな基礎となる貴い親石になることができる、またそうしなくてはいけないのではないのでしょうか。それは私たち一人一人の責任であると思います。沖縄は「命^{ぬち}こそ宝^{たから}」と伝え続けてきています。私は以前参加した「沖縄の旅」をきっかけに、沖縄三線を習い始め、沖縄の文化に目を開かれました。これほど豊かな文化を持つ沖縄を、二度と再び戦場にはなりません。

管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

2023年8月15日

主にある皆様へ

日本聖公会 首座主教 主教 ルカ 武藤 謙一
正義と平和委員会 委員長 主教 ダビデ 上原 榮正

8・15 平和メッセージ

まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。(イザヤ 30:18)

皆さまの上に主の平安をお祈りします。

戦後78年目の終戦の日を迎えます。太平洋戦争を経験していない世代が大多数となりました。日本は国内外で多くの犠牲者を出し、アジア、太平洋諸国の人々に悲しみや苦しみ、艱難を強いたことに深く思いを馳せ、懺悔し、不戦を誓い、日本国憲法を定めました。天皇制国家から民主主義国家となり、憲法では主権在民、自由、平和を大きく掲げて戦後を歩んできました。

しかし、最近の日本の動きは憲法が定め、国民が求めて来た平和とは違った方向に向かいつつあります。ロシアによるウクライナ侵攻を契機に、日本も含め多くの国々が安全保障を理由に軍事費を増額しました。外交や対話による平和ではなく、軍事力による安全保障を求めようとしています。沖縄には新たな自衛隊基地建設とミサイル配備がなされ、住民の避難訓練も行われています。武力の増強は戦争への緊張を高め、不安を掻き立て、更に危険な状況を生み出しています。

神のみ心は、人々が互いに赦し合い、愛し合い、世界を神の国とすることです。神の宣教は弱く小さく貧しくされた人々が大切にされ、生きることへの喜びを回復することです。神の義は、人間の罪を赦し、命へと導きます。戦争は日常生活と物と自然環境を破壊し、喜びと財産を奪い、命を殺します。戦争から生まれるものは、悲しみと憎悪です。神の正義と平和は人を殺しません。命へと導きます。戦争には平和も正義もありません。

日本聖公会は戦後50年目の1995年、「歴史への責任と21世紀への展望」と題して第1回宣教協議会を開催し、アジアの一員として他国民との共存共生のため、「平和」を中心に宣教することを確認しました。平和は一人一人の命と自由と人権が尊ばれ、大切にされる所から始まります。平和は人と人が互いに知り合い、語り合い、日々に深めていく絆によって築かれます。平和は人と人、社会と社会、国と国とが絶え間ない対話を続ける努力の上に構築されます。

イエス・キリストは人類と神との和解のために自らの命を十字架で捧げられ、復活によって私たちに新しい命への希望を与えて下さいました。命と平和への道こそ、私たちが歩むべき道です。今日まで日本が平和の中に歩んで来たことに感謝し、平和の尊さを確認し、平和を守り、平和を造る努力を共に続けてまいりましょう。

主に在りて。

世界の聖公会の動向

☆ 英国聖公会、大規模な化石燃料投資の停止を発表

☆ ウガンダ聖公会と「反 LGBTQ 法」をめぐる

管区事務所渉外主査

司祭 ポール・トルハースト

○英国聖公会、大規模な化石燃料投資の停止を発表

英 国聖公会の国家投資機関のうち2機関が、気候変動目標に沿っていないとして、莫大な化石燃料投資から撤退する計画を発表した。

103億ポンド相当の資金を管理する英国チャーチ・コミッショナーは、すべての石油・ガス会社や、それらの探査・生産・精製に携わるあらゆる企業への投資を完全に停止する。これは、パリ気候協定の目標に合致していないと考えられるためであった。

同様に、5,000万ポンドを超える投資を行なう英国聖公会の年金管理局も、パリ協定で目標とされた脱炭素社会への取り組みが十分でないとして、シェル社やその他の石油・ガス会社から資金を引き上げる意向を発表した。

チ ャーチ・コミッショナーの責任者であるカンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビー師は、次のように述べた。

「気候危機は、私たちが住む地球と、イエス・キリストが“自分のように愛しなさい”と呼びかける世界中の隣人たちを脅かしています。神の被造物を保護することは私たちの義務であり、エネルギー会社には、脱炭素社会へ正しく移行するという特別な責任があります。教会は科学だけでなく、内なる信仰にも従います。そのどちらもが今、気候正義のため働くよう私たちに呼びかけているのです。」

○ウガンダ聖公会と「反 LGBTQ 法」をめぐる

ア ングリカン・コミュニオン「4つの器」の1つであるカンタベリー大主教は、ウガンダ聖公会のステファン・カジンバ首座主教に書簡を送り、「すべての人々の自由と尊厳を守るといふ私たちの取り組みからの根本的な逸脱である」として、新しい「反 LGBTQ 法」に対する支持を見直すよう求めた。

ウ ガンダ聖公会はアングリカン・コミュニオンを構成する他の41管区と同様に、自治権を持って独立しながらも、相互的な関わりを有している。カンタベリー大主教を始めとしたランベス会議、首座主教会議、全聖公会中央協議会といったアングリカン・コミュニオンの諸機関は、各管区や首座主教たちへ指示する権限はない。

最 近発表された声明の中でカンタベリー大主教は、ステファン・カジンバ大主教に対し、アングリカン・コミュニオンのどの管区であってもこの法案を支持することに正当性はないと記したことを明らかにした。

ウガンダでは同性愛は以前から違法であった。しかし5月29日にヨウェリ・ムセベニ大統領が承認した新しい「反 LGBTQ 法」は、配偶者関係を結んだりゲイやレズビアンだと称したりした場合などに終身刑を科し、「重度」の罪には死刑を科す。また、LGBTQの権利擁護を含む同性愛の「促進」に対しては、20年の禁錮刑が定められた。

同法が大統領の承認を得た後、ステファン大主教は声明の中で、「反 LGBTQ 法 2023 の策定に議会と大統領が熱心に取り組まれたことを、ウ

ガンダ聖公会は歓迎します」と述べた。

さらに、ステファン大主教は次のように続けている。「ウガンダでは現在、同性愛が大きな課題となっています。なぜなら同性愛は私たちの意思や文化、宗教的な信条に反し、外部から強制されているからです。“人権活動家”と装っていますが、LGBTQを議題に加えることによって、真の人権が侵害されています。」

「私たちのコミュニティには同性愛者として知られる人々が常に少数存在していて、彼らとの関わり方は心得ています。この地域の言語で“同性愛”を表す言葉がほとんどないという事実こそ、それが私たちの文化やコミュニティに受け入れられていないことを示しています。聖書において、同性愛関係が決して肯定的に語られていないこととも一致しています。」

ス テファン大主教は、ウガンダ聖公会は“pro-life”（※生命尊重派）であり死刑を支持していないとして、さらに次のように付け加えた。

「ひどい性的嗜好や醜い同性愛は嘆かわしく思いますが、私たちはこれらの“罪”に対する死刑は望まず、終身刑の適用を推奨し続けます。」

今回の声明の中でカンタベリー大主教は、アングリカン・コミュニオンが長きに渡りLGBTQを罪と見なすことや同性愛嫌悪を避難することで一致してきたと述べた。

「これは、決してウガンダ聖公会の皆さんに西洋の価値観を押し付けることではありません。ただ、神の子としてふさわしい配慮と敬意をもってすべての人を扱うという、アングリカン・コミュニオンとしての取り組みを思い出していただきたいのです。」

ウ ガンダ聖公会が新法を支持していることについて、カンタベリー大主教は“悲しみと落胆”を表し、次のように述べた。

「アングリカン・コミュニオンのどの管区においても、このような法律を支持する正当な理由はありません。それこそ私たちの決議にも、教義にも、分かち合う福音にもです。」

私たちの中ではセクシュアリティの課題について意見の相違が続いていますが、神から与えられた人間の尊厳への取組み方において、これから一致していかなければならないでしょう。」

2023年 墓地清掃（青山霊園）と宣教師逝去者記念礼拝

管区事務所の恒例行事としての青山墓地清掃には、今回は首座主教も参加された。作業を

終えてから教師逝去者記念礼拝（墓参の祈り）を行ないました。主に感謝！（7月5日）



管 区 事 務 所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

放射性物質トリチウムを含む処理汚染水の海洋放出に反対します

2023年7月19日

内閣総理大臣	岸田 文雄 様
経済産業大臣	西村 康稔 様
環境大臣	西村 明宏 様
復興大臣	渡辺 博道 様
資源エネルギー庁長官	村瀬 佳史 様

東京電力福島第一原子力発電所で発生した汚染水を、多核種除去設備（ALPS）を通して浄化処理した処理汚染水について、政府は近く、海洋放出の開始時期を決定するとのことです。日本聖公会・正義と平和委員会及び大韓聖公会・韓日共同委員会は、この措置に反対致します。

ALPS 処理汚染水の海洋放出という措置については、福島県内外の自治体議会や漁業協同組合及び福島県漁業組合連合会が「漁業者の総意として絶対反対」という立場を明らかにしています。

また、韓国では、最大野党「共に民主党」が7月1日、ソウル中心部で大規模集会を開き、「国民の安全を守れ」「汚染水海洋投棄反対」と書かれたプラカードを掲げ、「周辺海域に影響なし」とする尹錫悦政権の対応を非難し、韓国の市民は各都市でろうそく集会を通じて「汚染水海洋投棄反対」を叫び続けており、韓国教会も声明書と署名、一人デモを続けています。

日本政府は海洋放出計画の安全性の検証を、国際原子力機関（IAEA）に依頼しました。この程、「国際的な安全基準に合致する」との包括報告書を入手し、計画通りの段階的な放出であれば、人や環境に与える放射線の影響は「無視できる程僅かだ」との評価を公表しています。

一方、米国サウスカロライナ大学のティモシー・ムソー生物学科教授は、2023年6月27日、国際環境団体グリーンピースが開催した記者会見で、トリチウムに関連する科学文献約70万件あまりを全数調査した結果、トリチウムが人体などに及ぼす生物学的影響を一部でも扱った研究は250件（0.03%）に過ぎなかったことを明らかにしました。特に発がんの影響についての研究はそのうちわずか14件に過ぎず、それさえもマウスなどの実験用動物を対象に行われた研究であり、人体に及ぼす影響についての体系的な研究は事実上一度も行われていないと分析しています。因みに、トリチウムに被曝した実験用マウスでは明確な強い影響が観察されたと報告しています。科学界では、トリチウムは遺伝毒性と発がん性を有しており、生殖系にも生物学的な影響を及ぼす恐れがあると考えられています。ムソー教授は、トリチウムが潜在的に重要な発がん性物質であることが予想されるにもかかわらず、低線量に晒された集団のリスクと危険性を評価するための情報が圧倒的に不十分だと結論付けています。

2023年2月7日に開催された太平洋諸島フォーラムの代表団との会談で、岸田内閣総理大臣は、「ALPS 処理水の海洋放出に関し、日本国民及び国際社会に対して責任を有する日本の総理大臣として、自国民及び太平洋島嶼国の国民の生活を危険に晒し、人の健康及び海洋環境に悪影響を与えるような形での放出を認めることはないことを改めて約束する」旨を述べています。(外務省のHPより)

福島第一原子力発電所の事故は、私たちにとって最も大切な“いのち”の危険を何よりも明確に示しています。私たちは「核と“いのち”は共存できない」と考えています。原子力エネルギーに依存する社会は、常にその危険性を後の世代に残していきます。私たちは原子力発電によって必然的に生まれた使用済燃料の処分や過酷事故により、広範な地域に拡散した放射性物質の除染や安全な処分が如何に困難を伴うものであるかを痛感しています。

まさに使徒パウロが、「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを私たちは知っています」(ローマの信徒への手紙8:22)と言っている通りです。

私たちは、ALPS 処理汚染水の海洋放出には国民の十分な理解が得られているとは考えておりません。海洋放出以外に、大型タンク貯留、モルタル固化処分など、既に実績のある方法も考えられます。そのような検討の余地を残して海洋放出が唯一の方法であるとすべきではありません。国民はもとより、周辺国の人々への誠実で丁寧な説明と話し合いを行ない、別の処分方法についての検討とその実施を早急に進める必要があります。

以上から、日本聖公会・正義と平和委員会、大韓聖公会・韓日共同委員会は、共同で東京電力福島第一原発の汚染水を浄化処理した後の放射性物質トリチウムを含む処理汚染水の海洋放出に反対を表明致します。

日本聖公会	日韓協働委員会	委員長	主教	磯	晴久
	正義と平和委員会	委員長	主教	上原	榮正
	原発問題プロジェクト長		主教	長谷川	清純
大韓聖公会	韓日共同委員会	委員長	主教	朴	東信
	正義平和委員会	委員長	司祭	千	濟旭
	生命気候連帯	会長	司祭	吳	東均



日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/>
☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。
comm-sec.po@nskk.org 広報主事(鈴木 一)宛て